

戦争前夜か、平和の夜明けか

2～3面 どうする？ 平和教育

たかまつなな（笑下村塾代表）

4～5面 「新しい戦前」に足を踏み入れた日本

Tansa記者 中川七海

6面 被爆の記憶なくとも

The Young Women's
Christian Association

YWCA

8

AUGUST
2026

No.793

〈第34総会期主題聖句〉

平和を実現する人々は幸いである
—マタイによる福音書5章9節—

〈ビジョン〉

女性がリーダーシップを発揮し、
人権・平和・環境を大切にする社会

〈ミッション〉

若い女性をエンパワーし、共に社会変革を進めます。

〈バリュー〉

キリスト教基盤 平和・環境 人権 セーフスペース

Since 1905

『戦争の 知ることが、平和の一步になる。 リアル』

どうする？ 平和学習

戦争のリアルを知り

答えのない問いを考え続ける

笑下村塾代表 たかまつなな

若者の政治参加を促すため「笑下村塾」を立ち上げ、全国各地の学校で主権者教育の出張授業を展開する、たかまつななさん。数年前から新しい平和学習の必要性を感じ、海外を取材するなどアップデートに取り組んできた。敗戦から80年が過ぎ、戦争体験の継承が困難な現状、たかまつさんの知見から、これからの平和学習のあり方を探る。

祈るだけでなく

平和はつくるもの

戦争を語り継ぐ「語り部」の方が高齢化し、戦争体験を聞くという従来の平和学習ができなくなった。どうすればいいのか……。全国の学校の先生から相談を受けるようになった。

私の尊敬するジャーナリストの先輩は、お子さんと一緒に広島で平和学習の旅をしたとき、「平和を祈りたい」と言われ、叱ったそつだ。「平和は、つくるものだ」と。本当にその通りだ

と思う。平和を祈るだけではなく、平和をつくるために、私たちができることは何かを考えることが必要だ。

新しい平和学習の教材を作ろう。そう考え、私はリサーチのため、海外に取材した。

ドイツの街中で若者にインタビューをして回った。「平和をつくるためにあなたがしていることは何ですか？」と聞いたら、「エシカル消費」と言われて驚いた。私たちは日々いろいろなものを買っている。エシカル消費とは買物の際に、環境や人権、倫理などに配慮して商品を選ぶことだ。私た

ちが使っているスマホには紛争鉱物が含まれている。自分たちの消費生活で、もしかしたら戦争を助長することもある、遠ざけることもできるかもしれない。「安い」「便利」などという価値観だけではなく、誰かに思いを馳せ、そこに苦しみ人をうまないようにするのも立派な平和な行爲だ。ある会社で児童労働が発覚した時に、海外で不買運動が広がり、企業は対策をせざるを得ない状況に追い込まれていた。私たちが持っている力は意外と大きいのだ。

子どもたちの夢は戦争が終わること

ウクライナには、戦争が始まってから半年のタイミングで入った。子どもたちに「夢は何か」と聞くと、「戦争が終わること」と全員が答えた。戦争のPTSDで眠れない子どもたち。学校が爆撃されて、学ば場がなくなった子どもたち。日常がある日突然、なくなってしまう。

ウクライナでは、みな優しく取材に協力的だった。「国際世論を味方につけないと、ウクライナは勝てない」そのことをウクライナの人たちは理解しているからこそ、優しいのだ。世界中から武器が提供される。その武器がな



いとウクライナの市民の命は守れない。ウクライナは攻め込まれた側だ。関係のない民間人や子どもが命を落としている。すごく申し訳なく、言いづらかったが、私は日本でよく聞かれる言葉をぶつけた。

「武器を輸出すると、戦争が長期化するから、今すぐに止めた方がいい」という意見があるが、どう思うか」

武器支援がなければ命を守れない現実

この問いに対して「私たちはロシアに攻め込んだ訳ではない。世界中の武器支援がなければ、民間人は亡くなってしまう。命を守るために必要なんだ」と市民の方は答えてくださった。

「殺傷能力のある武器の輸出が解禁される」日本ではそのことで賛否が巻

笑下村塾の出張授業

平和を作るために
私たちができること

政治や社会課題を楽しく、身近に、自分ごとに考える笑下村塾の出張授業。「平和学習」では、戦争の多様な要因を、「ババ抜きカードゲーム」形式のワークショップを通して学ぶ。平和をつくるためのアプローチや、日本・国際社会・個人それぞれにできることを考えていく。最後に、自分がやってみたいことを宣言する。実際に学校で行われた授業の様子をダイジェスト動画で観ることができる。



https://www.youtube.com/watch?v=h_YFoxLcCtE&t=50s



profile

たかまつなな

株式会社笑下村塾代表取締役・社会起業家。1993年生まれ。若者の政治参加(主権者教育)を専門に、「社会は変えられる」と信じて行動する若者を増やすため活動。出張授業や、若者の声を政策に反映する「高校生リバースメンター」を全国で展開し、累計11万人以上に届けている。対話を重視した政治YouTube番組「たかまつななのSocial Action!」(登録者24万人)を運営し、異なる立場の人とも建設的な対話を行い、社会課題の解決を考える場をつくる。「朝まで生テレビ」「ABEMA Prime」などにも出演。

き起こった。平和を大切にする国が殺傷武器を送るなんて、とんでもない、ゾワッとすると最初聞いた時は思ったが、専門家に聞くと、「ウクライナで市民を守るためのものでも、殺傷能力があるとして送れないものがある」という。私の中でも、どのような運用やルール、制約があればいいかは分らない。性悪説に立つて、悪い政治家などが出てきた時にそれを止める仕組みをどうやって作るのか、その仕組みに抜け穴があるのかなど、いろいろな考えを巡らす必要があるかもしれない。知らないから、なんとなくの怖さだけで反対したり、議論に口を閉ざしていいのかと考えるようになった。戦争のリアリティを知り、答えがない中でも、日本ができること、私たち一人ひ

多様な視点に立ち
積極的に話し合う

とりが世界市民としてできることは何か、考え続けることが重要だと思う。

平和教育が進んでいるドイツでは、高校の授業を見学した。政治番組風にロールプレイングをして、生徒たちはいろいろな役になりきって武器輸出に賛成か、反対か議論していた。最後に、自分は賛成か反対か、意見表明していた。多くの生徒は賛成であった。「民主主義を守るために必要」と訴えていた。戦争のリアルに蓋をするのではなく、積極的に話していたのが印象的だった。

日本でウクライナのことを取り上げ

必要なのは
積極的中立性

ようとしたときに、NGになったことがあった。「ロシアにルーツがある子がいたら、いじめられるかもしれない」ということだった。その子が始めた戦争ではないことをむしろ伝えないと、かえっていじめにつながるのではないか。

このほかにもさまざまな理由で、学校現場が臆病になりすぎるあまり、具体的な政治事象、政治に関連する営みや出来事について扱えないケースが多々ある。実際に具体的な事象に触れている学校は3割以下という文科省の調査もある。

学校現場が萎縮すれば、子どもたち

が学ぶ機会を失う。基地問題も、防衛も、外交も、教室で誰とも対話しないまま大人になり、SNSの断片的な情報だけで自分の立場を決めていく——そんな社会を、私たちは本当に望んでいるのか。

日本は「政治的中立性」を気にしすぎるあまり、結局、政治教育をしない「消極的中立性」をとっていることが多い。そうではなく、それをやらなかった時の社会的なリスクを考え政治教育をどんどんやっていく欧州のような「積極的中立性」が必要だ。

答えがないからこそ、社会課題と向き合って議論して考える。私も考え続け、少しでも行動して平和な社会に貢献したい。

「新しい戦前」に 足を踏み入れた日本

～熊本・健軍でのミサイル配備

2026年3月、熊本市の陸上自衛隊・健軍駐屯地に長射程ミサイル「25式地対艦誘導弾」が搬入、配備された。ミサイルの射程はおよそ1000km。中国の沿岸部が射程圏内に入り、自衛隊が初めて相手の拠点を攻撃する能力を得たことになる。

健軍駐屯地のそばには、市民病院や学校、住宅が立ち並ぶ。

ところが住民への説明もなければ、いざという時の避難計画もない。疑問を呈する人々の声は踏みにじられている。

配備はなぜ熊本からだったのか。

Tansa記者 中川七海

戦前と同じ構図

3月9日午前0時過ぎ、熊本市の陸上自衛隊・健軍駐屯地に、国内初となる長射程ミサイルが搬入された。

住民が搬入日を知ったのは、直前の3月7日の夜。NHKがニュースで「早ければ8日深夜に搬入」と報じたからだ。住民たちは急ぎよ、現場での抗議を決める。3月8日夜8時ごろから健軍駐屯地の正門前に集まった。いつやつて

来るのか分からない中で、約100人が抗議した。

9日深夜0時過ぎ、正門前に1台のトラックがやって

来た。住民たちは「ミサイル配備反対！」と声を上げる。だが、それはミサイルではなかった。同じころ、抗議に立つ住民の少な



立ち上がった女たち

「日の出」に4台の車両が入って行く。これが、ミサイルの発射装置だった。住民たちがまともに抗議する余地もなく、搬入は静かに遂行された。政府もマスコミも、搬入日がいつかを市民には知らせなかった。情報がなければ、搬入を止めるための抗議ができない。知らせないことで、国家権力とマスコミが、戦争への危機感から市民を遠ざける。戦前と同じ構図だ。

ミサイル配備完了から2週間足らずの4月11日、熊本上空を6機の戦闘機が飛んだ。航空自衛隊のチーム「ブルーインパルス」によるアクロバット飛行だ。「熊本地震10年復興イベント」だという。熊本城のふもとにある「二の丸広場」周辺には、約6万人の観衆がやって来た。

子どもから大人まで、カメラを片手に機体を追う。演舞が成功するたびに歓声が上がる。

「平和を求め軍拡を許さない女たちの会 熊本」の事務局長 海北由希子さん（熊本YWCA元会員）は、自宅のベランダからブルーインパルスの飛行を眺めた。「多くの人が、ブルーインパルスを見てかっこいいと感じるのは、自然なことですよ。だって、かっこよく魅せていますから。だけど、あれは戦闘機なんです。人を殺すための道具なんです。そういったものを礼賛する風潮は、戦時と同じで危険ですよ」

「でも軍都・熊本には、軍事的なものをすんなり受け入れてしまつた土壌があるんです」

1871年、明治政府の樹立から3年で、政府は天皇直属の部隊「鎮台」を全国4カ所に設置した。東北鎮台（仙台）、東京鎮台、大阪鎮台、そして熊本の「鎮西鎮台」だ。その後、熊本城に軍の司令部が置かれた。県の中心市街地に、軍都としての基盤が築かれていった。

150年以上の歴史がある軍都で、2023年に発足したのが「女たちの会」だ。

きっかけは、前年の12月。岸田文雄

Tansa報道シリーズ

『イマジン
戦争をさせないために』あわせて
読みたい

ベトナム戦争の最中、平和な世界を想像することの重要性を歌ったジョン・レノン。そうした想像力を持たない高市首相は、戦争ができる国にするために改憲を目指す。戦争が始まる前の1930年代と酷似する現代。政治権力の暗部をえぐり、平和を願う市井の人たちの息遣いを伝えることで、「戦争をさせない」ための大きなうねりを起こそうとTansaが発信する探査報道シリーズ。戦争準備が進む日本の実相を、まずは熊本から、独自取材で掘り起こしている。

https://tansajp.org/investigativejournal_category/imagine/



profile

Tokyo Investigative Newsroom Tansa

探査報道を専門とする、非営利独立の報道機関。前身は早稲田大学ジャーナリズム研究所の『ワセダクロニクル』。2018年、大学から独立してNPO法人に。21年「Tokyo Investigative Newsroom Tansa」に改名。大手メディアの記者クラブ報道とは一線を画し、独自の取材で政治、企業、組織などが隠ぺいする不正を暴いていく。近年のおもな記事に『公害PFOA』、シリーズ『人質司法 悪党たち』、デジタル性暴力に迫るシリーズ「誰が私を拡散したのか」ほか。

<https://tansajp.org/>

2025年8月、自衛隊が健軍駐屯地へのミサイル配備を発表した。だが健軍駐屯地の周辺には住宅地が広がり、多くの幼稚園や保育園、小中高校がある。避難が容易ではない人々を抱える市民病院や特別支援学校、盲学校、ろう学校が半径1km圏内に立ち並ぶ。

政権による「安保3文書」の改定だ。敵基地攻撃能力の保有や、防衛費をGDP比2%に増額することなどが明記された。全国の女性たちが2023年1月、オンライン署名サイトで軍拡を止めるための署名を立ち上げ、翌2月に東京を中心に活動する「女たちの会」と同時に、「女たちの会 熊本」が発足した。

日本の縮図

長射程ミサイルの配備先として健軍駐屯地が選ばれた背景には、軍都であることに加え、もう一つの重要な要素が

女たちの会メンバーは駐屯地前や市内の商店街、公園で抗議のデモを重ねた。ミサイル搬入日を防衛省や自衛隊が知らせなかったのは、「軍事的なるもの」に従順なはずの軍都・熊本で、市民が搬入当日に抗議する事態を避ける狙いがあったのだ。



それは健軍駐屯地を抱える熊本1区が、木原総官房長官の地元である点だ。彼は、軍拡路線をひた走る高市早苗首相の最側近。首相の政治思想を支持することで、無名の国会議員から官房長官にまで「出世」した。防衛大臣も23年9月から24年10月まで務めている。時の権力中枢にあつて、長射程ミサイルの配備地として、自身の地元を差し

ある。

出した格好だ。しかし古今東西、軍事基地が攻撃対象になることは常識だ。イラン戦争をみるだけでも分かる。しかも健軍駐屯地には、政府が対中国の防衛力強化を謳う「南西シフト」の司令塔・西部方面総監部も置かれている。重要なのは想像力を持つことであり、想像力とは歴史に学び、他者と未来に思いを馳せることだ。そこに、敵も味方もない。女たちの会はミサイル配備に反対する際、「市民の命も、自衛隊員の命も守りたい」と訴えている。長いものに巻かれながら戦争へと向かうのか。想像力を持った市民が連携して事態を食い止めるのか。健軍で起きていることは日本の縮図なのだ。

語り継ぐ「戦争のリアル」 被爆の記憶なくとも

弘前YWCA元会長
武藤裕子

8月6日の母を辿る

1945年の夏、1歳9か月だった私は、両親と姉、兄と共に広島市に住んでいました。父は痩せていたからか召集されずにいましたが、このころになると根こそぎ動員され、とうとう赤紙がきました。8月5日、入隊した父から「明日、鹿児島に配属されるから面会に来てほしい」と知らせがあり、母は、たまたま来ていた母方の祖母に私を託し、姉兄を連れて汽車で1時間ほどの大竹の軍港に行きました。

8月6日の朝、家に帰るため母たち



は8時ごろに広島駅に着きました。路面電車に乗り換え、ちょうど広島信用金庫の前に差し掛かった時に、原子爆弾がさく裂しました。この信用金庫の鉄筋コンクリート3階建の社屋が盾となり、母たちは奇跡的に無事でした。気がつくともどりは焼け野原で、他の電車は丸焦げ。そこから家に向かう道のりは「ほんとうに地獄だった」といいます。手の先に何かぶら下げている人がいて、よく見るとそれは皮膚でした。母が言うには、腕が焼けただれ、皮膚がずるずると手の先まで剥け落ちて爪の所でぶら下がっていたのです。あちこちで「水筒の水をください」と求められても、私に飲ませなければと必死だったという母は、「地獄」をかくぐったのだと思います。

途中、町内の人から「お子さんはおばあちゃんと救護所に行った」と。姉によると、救護所で私を見つけた母は駆け寄って、私の腕や顔に刺さったガラス片を泣きながら抜いたそうです。祖母はいませんでした。町内の人と言った「おばあちゃん」は、隣家のおばさんのことだったのです。母から留

守にすると聞いていた隣家の人、私を救い出してくれたのでした。翌日、母が自宅に戻ると、家は焼け尽くされ、台所の柱があつた跡に白骨だけが残っていたといいます。

記憶のない被爆者

結局、父は出征することなく、私たち家族は父の故郷の島に避難して過ごしました。戦後、落ち着いたのちに広島に引越し、中学から大学まで広島女学院に通いました。1957年の原爆医療法によって、学校ごとに被爆者手帳を申請することになり、私は深く考えずに提出しました。しかし、当時の若い女性のなかには、結婚の妨げになると申請しない人もいたそうです。

このころの私は、コーラス部で合唱に励んでいて、被爆者であることをどこか呑気に捉えていたように思います。目が開かれたのは、結婚後しばらくして弘前に引越してからです。

沖縄のガマの中で

1998年、キリスト教のつながりから弘前YWCAの設立に参加しました。青森には原発や核燃料再処理施設があつて、私たちは核の問題や平和活動に熱心に取り組みました。YWCAで学びを深め行動するうちに、被爆の体験記憶がなくても自分

が声にしなれば「ない」ことになると気づき、平和集会などで、母から聞いた被爆体験を語るようになりました。

20年ほど前、YWCAの憲法研究会で、生まれて初めて沖縄に行きました。戦跡巡りでガマに入って、黙とうのためガイドさんが灯を消した瞬間、思わず涙が出ました。「ああ、ここは広島と同じだ」と実感したのです。

実際に見て体験して初めて知ることがあります。若い方たちはぜひ沖縄、長崎、広島に足を運んで、戦争の実相を知ってほしいと思います。

いつの間にか戦争が始まる

現在の日本は、戦前と同じ方向に進んでいるようです。いつの間にか政府は、原発が60年を超えても稼働できるようにし、気がつけば国旗損壊罪など酷い法案を次々と可決しています。一番恐ろしいのは、憲法9条の改憲です。あの時代のように、あれよという間に戦争は始まります。ここ数年、大江健三郎さん、坂本龍一さん、大きな声で反戦を訴えてこられた方々が亡くなりました。私一人の声では聞いてもらえません。どうか大勢で立ち上がって、声をあげ続けてください。若い方たちはSNSに流されず、その声に耳を傾けて、ぜひ考えてほしいと願います。



『辺野古の浜の文子さん』

いわしたみちこ 著
えんどうたかこ 絵
高文研 (2026年) 2,200円

長野県で平和運動に取り組む著者は、ある集会で「文子おばあ」こと島袋文子さんの戦争体験を聴く。15歳で沖縄戦の地獄をくぐり、過酷な戦後生き延び、今も辺野古の基地建設現場の前で座り込みを続けるおばあさんの人生は、沖縄の歴史そのものだった。本土の人々に知ってもらおうと、沖縄に通って文子さんの語りを丁寧に聞き取った。沖縄の平和運動、そして平和教育へのバッシングが強まる今日、おばあの声に耳を傾け、反対運動の原点を知ることが、大きな意味があるはずだ。沖縄のドキュメント作品を手掛ける映画監督の三上智恵さんが監修・解説。



『秋』

かこさとし 作
講談社 (2021年) 1,870円

だるまちゃんシリーズなどで親しまれた絵本作家が大好きだった季節、美しく実り豊かな「秋」の風景を描きながら、18歳のときに体験した戦争の記憶へと誘う。食べる物もなく、勉強も満足にできない悲惨な暮らし、そして身近な人々の死。戦争のさなかでも訪れる秋の澄み渡る青空の下で、著者は落下する戦闘機と兵士を目撃する——。自然の変わらぬ美しさとの対比を通して、戦争をする意味を問い、平和への強い願いを静かに語りかける。いまなお世界各地で争いが続くなか、次の世代へ語り継ぎたい大切なメッセージが込められている。

絵本・児童書が伝える 戦争のリアルと平和への願い

戦争の記憶に触れるなら、絵本や児童書はいかがでしょう。作者の戦争体験や次世代につなげたい平和への願いが、誰にでも読みやすいコトバで静かに確かに語りかけてくる。その声に耳を傾け、平和のために何ができるか、考えてみよう。



『みどりのゆび』

モーリス・ドリュオン 著
安東次男 訳
岩波少年文庫 (2002年) 825円

触れた場所に花を咲かせる不思議な「みどりのゆび」を持つ少年チトの物語。大戦期にナチスドイツへのレジスタンス活動に身を投じたフランス人作家モーリス・ドリュオンが、冷戦期の軍拡競争に危機感を抱いて描いた唯一の児童文学である。わが子を愛しながらも、兵器工場で富を築く父に向けられる少年チトのまっすぐな瞳は、大人社会の矛盾をつまびらかにしていく。「ぼく、花で戦争をやめさせたよ」争いと破壊を繰り返す理不尽な現実の前でも、一人ひとりが心に「みどりのゆび」を持ち、平和の種を蒔き続けることの意味を考えさせられる。



『Garden 8月9日の父をさがして』

森越智子 著
大野八生 絵
童心社 (2025年) 1,980円

ぼくには名前にまつわるヒミツがあった。ある日、遺品の中に被爆者健康手帳を見つけて初めて、ぼくは父さんが8月9日に長崎で入市被爆をしたことを知る。決して語られることのなかった父さんの過去とぼくのヒミツの手がかりの細い糸をたどって、ぼくと妻のハルさんは故郷の長崎へと向かう。そこで「あの日」の父さんの足跡を追っていくうちに、ぼくたちが見つけたのは……。本書の担当編集者が実際に経験したエピソードを題材として、著者が長崎での丹念な取材を通じて書き上げた、戦争を知らない世代に原爆被害の実相を語り継ぐ1冊。

エンパワーするNGO



2026年度加盟YWCA中央委員会開催

YWCAの「Re / Design」に向けて

第34総会期2回目となる、2026年度加盟YWCA中央委員会が5月30日、オンラインで開催された。それに先立ち、5月24日にはオンラインで会長会を持ち、加盟YWCA中央委員会に向けて会長間の交流を深め、電子投票の体験等を行った。

開会で樋口さやか日本YWCA会長は、世界が不安定で混沌としている今だからこそ、YWCAが「この場所に関わりたい」「ここで活動したい」と思われる存在であり続けられるかが問われている、と述べた。ビジネスセッションでは、日本YWCA運営委員会のもとに始動した4つの委員会の活動報告、昨年からの新体制となった評議員会・理事会の動きと決算報告、さらに今年度の予算及び事業計画が示され、いずれも承認された。協議では、原発や核燃料再処理工場の立地にあり、粘り強く平和活動に携わり続けた弘前YWCAの解散が承認された。武藤裕子会長からは広島での被爆の経験にふれ、YWCAの「核」否定の思想の若い世代への継承を望むメッセージが述べられた。

最後に、樋口会長の進行で「組織としての地域YWCAの

あり方を考える」ワークショップが行われた。『社会変革のためのRe/Design ～世代を超えて未来図を考える～』をテーマに11月に大阪で開催されるYWCAフェスタに向けて、各地域YWCAの「現在地」を確認し、YWCAのミッション「若い女性をエンパワーし、共に社会変革を進める」を実現するための活動ができているかを小グループに分かれて話し合った。ワークショップではまた、地域YWCA独自の活動を継続していくための一つの選択肢として前回の全国会員総会で導入が決まったウェブ会員制度が改めて紹介された。閉会では5月に台湾で行われたYWCAアジア地域会議の様子を、雀部真理日本YWCA副会長が写真を交えて報告した。

先行き不透明で、将来の予測が困難な今、多様な世代や立場の人々とつながりながら、新たな担い手を生み出していくためにも、YWCAの「Re/Design」を会員の一人ひとりが自分事として考える必要があると思う。

日本YWCA書記 吉田亜希

リバイバル配布

特集

「子どもが見た敗戦」
2020年8月号

1945年8月15日——疎開先の長野で、生まれ育った旧満州で、2人の少女が体験した敗戦の記録（絵日記）と記憶（手記）を共有します。ほかにも、1945年8月6日の原爆投下直後、被爆した作家・原民喜が辿った痕跡を、夏の日かけて編集部員が追体験した「小説『夏の花』を歩いてみよう」など、全編を通して「戦争のリアル」から平和を考える号。今も十分に活用していただけます。

PDF版 https://www.ywca.or.jp/japanywcabulletin/ywca_757-2/



紙版の問い合わせ office-japan@ywca.or.jp

ご協力ありがとうございます
賛助費
石渡能子 磯村美保子 小野小夜子
川江亜希子 谷川いつみ 実生律子
ピースメーカーズ募金
（平和を創り出す女性のリーダーシップ養成）
木村美典 木村葉子 篠原道男
谷川いつみ 実生律子
木岡ファミリー基金
株式会社コロナピアスポーツウェア
ジャパン
大阪女学院中学校・高等学校
北星学園女子中学高等学校
女子学院中学校・高等学校
西南学院中学校・母の会
弘前YWCA
災害時支援募金
（国内外の災害被災者支援）
館由希子 実生律子
一般財団法人YWC A
（オリンピックの木キャンペン募金）
木村詠美 鈴木彩江 富谷千里

ひろせかずし 吉岡真紀子
（ウクライナ支援）
カジモトナオコ 嘉屋陽子 牧南
捜真女学校中学校・高等学校
（パレスチナYWCA支援）
嘉屋陽子 牧南
0422市民クリスマス実行委員会
フィッシャー幼稚園
（ビルマ／ミャンマー支援募金）
笠置正民
東日本大震災被災者支援募金
大野のどか
日本福音ルーテル大森教会
捜真女学校中学校・高等学校
日本YWCAユースエンパワメント基金
嘉屋陽子
セーフスペース事業への一般寄附
実生律子
（2026年4月16日～6月15日敬称略）

発行所 公益財団法人日本YWCA 〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11 東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121 Fax. 03・3292・6122 office-japan@ywca.or.jp www.ywca.or.jp

編集発行人 藤谷佐斗子／偶数月1日発行

旬な情報発信しています メルマガ登録 y-net@ywca.or.jp にお名前を送ってください／フェイスブック www.facebook.com/YWCAJapan